

H24-D1-1 深度53.77~54.54m 断層ガウジの幅 (No.17) を変更

- 従前提示していたデータでは性状一覧表に断層ガウジの幅を1.5cmと記載していたが、以下のことから、1.0cmが正しい値であるため、1.5cmから1.0cmに変更した。
- コア観察カードには深度53.77~53.80m間を粘土状破碎部(Hc-2)として、幅1.5cmと記載していたが、コアの再観察の結果、深度53.77~53.78m間は石英粒や岩片を主体とすることから、変質したカタクレーサイトであると判断した。一方、深度53.78~53.80m間は連続性及び直線性が良い粘土主体であることから断層ガウジであると判断した。
- 断層ガウジの範囲を変更したため、それに該当する真幅を測定し、1.0cmとした。

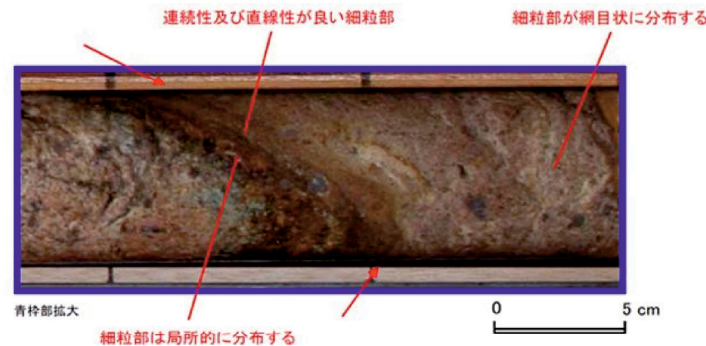
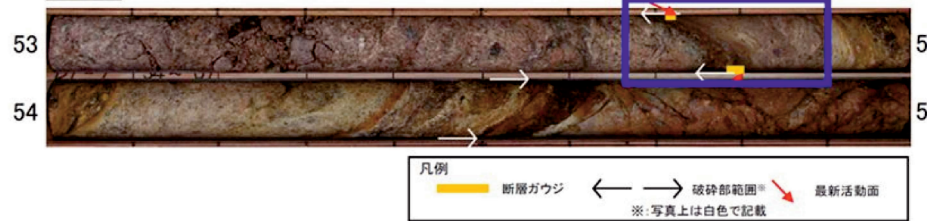
H24-D1-1 深度53.77~54.54m:断層岩区分の評価(1/3)

- 深度53.77~53.78mの「粘土質礫状」と記載の箇所については、やや軟質であるが、含まれる細粒部は局部的に分布し、連続性及び直線性に乏しく、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織も認められる。これらのことから変質したカタクレーサイトであると判断した。
- 深度53.78~53.80mの「粘土状」と記載の箇所については、軟質で、細粒部の連続性及び直線性が良く、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織も認められない。これらのことから断層ガウジであると判断した。
- 深度53.80~53.90mの「粘土混じり岩片状」と記載の箇所については、やや硬質で、含まれる細粒部は網目状に分布し、連続性及び直線性に乏しく、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織も認められる。これらのことから変質したカタクレーサイトであると判断した。

ボーリング柱状図

●53.77~54.54m: 破碎部
 53.77~53.78m: 粘土質礫状部 (Hb)
 上端65°, 下端65° ともに直線的に連続。径1~8mmの石英粒や花崗斑岩の岩片主体で基質は黒褐色粘土からなる。黒褐色を呈する。幅5~10mm。
 53.78~53.80m: 粘土状部 (Hc-1)
 上端65°, 下端65° ともに直線的にシャープに連続。軟質。灰褐色を呈する。幅5~10mm。
 53.80~53.90m: 粘土混じり岩片状部 (Hj)
 上端65° で直線的にシャープに、下端20° でやや波打って連続。径1~4mmの石英粒と径10mm前後の粘土化した岩片を主体とし、岩片間の一部に白色粘土を伴う。灰褐色を呈する。幅100~160mm。

コア写真



該当箇所のコア観察カード

53.77~54.54m: 破碎部
 53.77~53.80m: Hc-2 (主断層・53.77m)
 上端65° 下端65° 両者直線的にシャープに連続。
 1~3mmの石英粒を伴う。岩片は含まない。厚約1.0cm
 粘土厚1.0cm

粘土の幅の記載

H24-D1-1 深度53.77~54.54m 断層ガウジの幅 (No.17) を変更



- 深度53.77~53.78m間は石英粒や岩片主体、深度53.78~53.80m間は粘土主体で、性状が異なることからカタクレーサイトと断層ガウジに区分した。
- 断層ガウジの範囲を変更したため、それに該当する真幅を測定し、1.0cmとした。

断層ガウジ・断層角礫の幅算出資料(H24-D1-1 深度53.77~54.54m)

・実測した断層ガウジの幅は1.0cmである。

コア写真

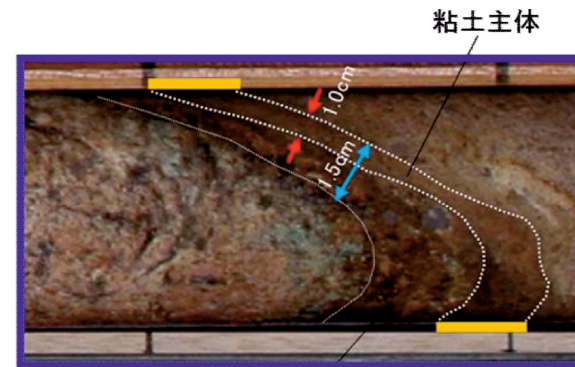


凡例
 断層ガウジ  破碎部範囲*
 ※: 写真上は白色で記載



青粋部拡大



0 5 cm



青粋部拡大

0 5 cm

石英粒や岩片主体

凡例
 : 従前の断層ガウジ幅
 : 変更後の断層ガウジ幅

1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響

・明瞭なせん断構造・変形構造を有に変更 (No.19)

【理由】コアを再観察した結果、明瞭なせん断構造・変形構造が確認できた

【断層連続性評価への影響】なし

2. 変更箇所

a 明瞭なせん断構造・変形構造を「有」に変更 (No.19)

H24-D1-1 深度58.96~59.30m 明瞭なせん断構造・変形構造 (No.19) を変更

- 従前提示していたデータでは性状一覧表に明瞭なせん断構造・変形構造の有無を「無」と記載していたが、以下のことから、明瞭なせん断構造・変形構造の有無を「無」から「有」に変更した。
- コアの再観察の結果、最新活動面に沿った断層ガウジに灰赤色と灰白色の層状構造が認められることから、明瞭なせん断構造・変形構造は「有」である。
- 従前提示していたデータでは明瞭なせん断構造・変形構造を「無」としていたが、従前の作業プロセスでは今回の元となるデータに相当する記録を作成していなかったため、「無」と記載した根拠がトレースできなかった。

明瞭なせん断構造・変形構造の有無 (H24-D1-1 深度58.96~59.30m)

• 最新活動面に沿った断層ガウジには灰赤色と灰白色の層状構造が認められることから、明瞭なせん断構造・変形構造は「有」とした。

コア写真



凡例
 断層ガウジ ← → 破砕部範囲 ※: 写真上は白色で記載
 最新活動面

灰赤色部

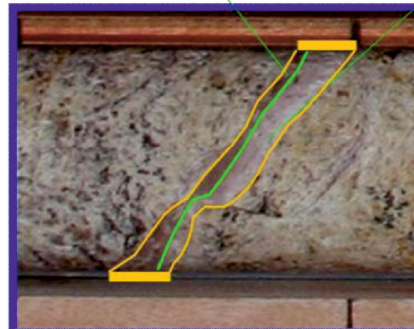
灰白色部

層状構造



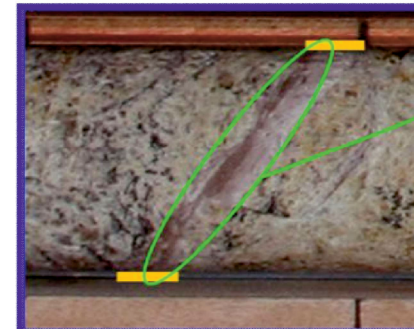
青枠部拡大

0 5 cm



青枠部拡大

0 5 cm



青枠部拡大

0 5 cm

凡例
 断層ガウジ

H24-D1-1 深度60.12~60.15m 最新活動面を示す赤矢印及び薄片作製位置を示す赤枠の位置 (No.20) を修正

従前

見直し後

第833回審査会合

机上配布資料1

敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について

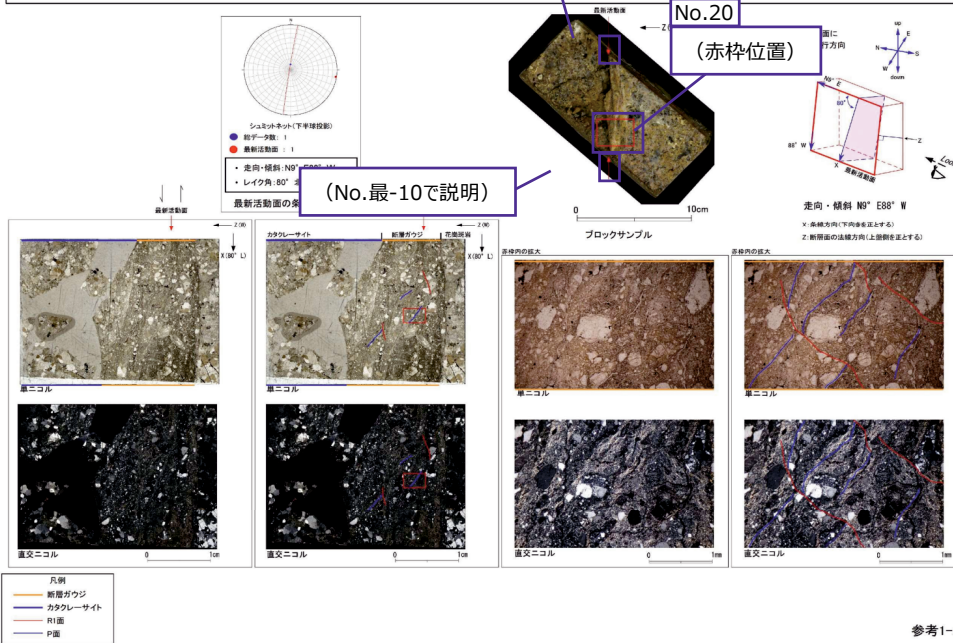
参考資料1 薄片観察結果

参考1-25頁

第833回審査会合 机上配布資料1に追記(青太枠)

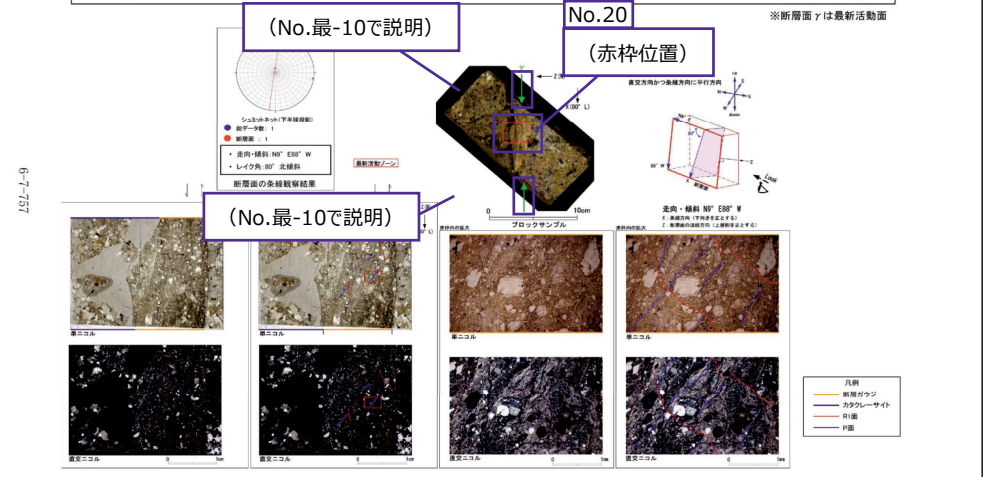
D-1破砕帯 薄片試料観察(H24-D1-1 深度60.12m)

H24-D1-1のボーリングコア(深度60.12m)から採取した薄片試料の観察結果によれば最新活動面の変位センスは、正断層成分が卓越する。



参考1-25

H24-D1-1のボーリングコアから採取した薄片試料の観察結果によれば最新活動ゾーンの変位センスは、正断層成分が卓越する。
 ・最新活動ゾーン以下の特徴が認められることから、断層ガウジと判断した。
 > (断層ガウジ)せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められる。
 > (断層ガウジ)基質は粘土鉱物を主体とする。
 > (断層ガウジ)粘土状部の分布は帯状で直線的である。
 > 岩片は少ない。
 > (断層ガウジ)丸みを帯びている岩片が多い。



第7.4.4.252図(3) 破砕部性状 H24-D1-1 深度60.12~60.15m (変位センス, 薄片観察による断層区分(1/3))

1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響

・走向・傾斜をN23W86Eに変更 (No.22)

【理由】走向・傾斜の判読作業時に誤りが生じた。なお、薄片試料の作製は正しい位置で行われており、観察結果に影響はない。

・条線方向を33Lに変更 (No.23)

【理由】走向・傾斜の見直し (No.22) により、基準方位が変わることに伴う変更

・断層ガウジを示すカラーバー及び断層角礫を示すカラーバーの修正 (No.24)

【理由】資料作成時に観察事実と異なる内容が誤って記載されていた。

【断層連続性評価への影響】なし

2. 変更箇所

a 走向・傾斜を「N23W86E」に変更 (No.22)

b 条線方向を「33L」に変更 (No.23)

c 断層ガウジを示すカラーバー及び断層角礫を示すカラーバーの修正 (No.24)

d 見直し後の走向・傾斜、条線方向に基づく図に変更 (No.22,23)